

心の輪を広げる体験作文 小学生部門 最優秀賞

「弟」

相模原市立弥栄学校 五年 向江 由輝也

むかえ ゆきや

ぼくには、六才年下の弟がいます。弟は、障害を持って産まれてきました。弟が出来てすぐ、うれしかったので、産まれてすぐに顔を見たかったけれど、とても小さく産まれたので、NICUという所に入っていて、会えたのが、産まれてから、十日後のことでした。やっと会えて、うれしかったけれど、まどごしでしか会えなかったので、抱っこ出来ませんでした。抱っこ出来たのは、たいいんした二か月後でした。弟が家に来て、ぼくは、大切にしようと思いましたが。弟は重い障害があるので、ごはんを食べるのも、一時間ぐらいかかります。お母さんが、いそがしい時は、ぼくが食べさせるのを手伝ったりします。耳が聞こえないので、弟の思っている事がわからなくて、困ってしまいます。おなかですいているのか、あついのか、ねむいのか、何で泣いているのか分かりません。留守番を弟と二人でしている時に、泣き出して、抱っこしても泣きやまない時は、ほんとうにどうしようかと困ってしまいます。なんとか、お母さんが帰ってくるまで、抱っこして、がんばっています。そんな弟ですが、いい所もあります。ねている顔や、笑顔がとても、かわいくて、たまりません。笑顔は、くしゃくしゃになるぐらい笑います。弟の笑顔を見たら、ものすごくおどろくのではないかと思うほどです。現在、弟は、五才になります。ふつうの五才だったら出来る事も、弟は出来ません。言葉をはなす事も、歩く事も、ごはんを

自分で食べる事も、着がえる事も、一緒に遊ぶ事もできません。でも、ぼくにとっては、いつまでも赤ちゃんみたいで、かわいいです。出来ない事は、家族で手伝ってあげて、協力しあっています。最近、弟が出来る様になった事は、トイレでうんちが出来る様になった事です。ふ通の人だと、あたりまえだと思いましたが、弟にとっては、すごい事です。ここでぼくが思うことは、ふ通の人では、たいした事じゃなくても、障害のある人にとっては、大変な事だということです。何か一つ出来る様になるには、すごい努力が必要です。だから、ちょっとした事が出来ただけでも、すごく、うれしくなります。こんな、ゆっくりな成長の弟ですが、ぼくの大好きな、かわいい弟です。この次、何が出来るようになるか楽しみです。